



「江戸の日本橋より唐阿蘭陀まで境なしの水路なり」

江戸後期の経世家・林子平が「海国兵談」で説いた警句である。中国、オランダに限らず、世界は海でひと続きである。

海防論の言の通り、ロシアがウクライナを襲った黒海の暴風雨はホルムズ海峡で大風波を起こし、台湾海峡に波風を立て始めた。第



山内 昌之

東大名誉教授

戦略的思考

「気がつけば大戦」の危機

2次世界大戦の終結以降、今日ほど戦争が世界各地で多発した時もないだろう。特に米国は、反テロ作戦を含め7か国と2海域で事実上の戦争状態にある。イラン、ベネズエラ、イエメン、シリア、ナイジェ

リア、ソマリア、イラクに加え、カリブ海の麻薬密輸船への海上警備行動、ホルムズ海峡内外での逆封鎖作戦がそうである。

しかも、プーチン露大統領はベラルーシに核弾頭を配備し、トランプ米大統領

える恐怖心を物ともせず、おぞましい我を張る。リーダーの卑怯な振る舞いをたしなめる者は、周りに誰もいないようだ。スパルタ王のアルキダモスなら「ああ、軍人の勇気は無くなつた」と嘆息もしよう（プル

く、中東のように周辺国や大国をたやすく巻き込み、地域を超える「複合危機」になりがちだ。第二に、中東やウクライナでの対立は、エネルギー資源や宗教、宗派、民族の対立をめぐる米露中など大

はイランの発電所や製油施設への攻撃で同国を石器時代に戻すと威嚇した。イランもまた、湾岸アラブ諸国の淡水化施設を爆撃すると脅迫している。

彼らは、一般市民の生存権を脅かす最後の一線を越

タルコス「モラリア」3、松本仁助訳）。10年前、私は「中東複合危機から第三次世界大戦へ」という本で、次の3点を強調した。第一に、重度の地域紛争は「一国家対一国家」といった戦争ではな

国の思惑も重なり、第3次世界大戦に発展する火種を抱えている。第三に、全面的な大戦が今すぐ起きるといふより、古代のペロポネソス戦争や第1次世界大戦のような「気がつけば大戦」というのだ。〈2面に続く〉